

## 【診療所新時代】

# いまこそ 診療所の時代！

第32回

## 地域を楽しもう

# 廃校の決まった地域で 未来を育む

栃木県・佐野市国保氷室診療所長

橋村和樹

### はじめに

私は東京で生まれたため、そもそもへき地医療というものが何なのかを知ることもなく育ってきた。将来も何となく「何かの専門医にでもなるのだろう」と思っていた。しかし、医学部に入り学年が上がるにつれ、専門を定めてその領域のみに邁進するという「専門医」志向の医師像よりも、人間の全体像を見て、すべての病や問題点を可能な限り改善する「総合医」志向の医師像を目指したいという気持ちが出てきた。

学生時代に地域のクリニックで実習したり、研修医時代に伊豆諸島で島嶼医療を経験したりして、その気持ちは「へき地医療に従事したい」というものに昇華されていった。しかし、私には縁のあるへき地などない。困っていた私は適当に各県に応募した。その結果、すぐに返事をくださったのが栃木県ドクターバンクであり、紹介していただけたのが今勤務している佐野市の国保氷室診療所である。

いま私は偶然出会った同地に永住しようとしており、人間の運命とは妙なものだと思いながら筆を執っている。

### 佐野市氷室地区の概要

私の勤務する国保氷室診療所(写真1)は、栃木県佐野市にある。佐野市というと佐野ラーメンやアウトレット、ゆるキャラグランプリの「さのまる」によっ



写真1 氷室診療所外観

て全国的な知名度もそこそこあるため、そのような所にへき地診療所があることに驚かれることもあるが、市街地より自動車でも40～50分かかる群馬との県境にほど近い所に当診療所はある。

今の佐野市は平成の大合併により、2005年に旧佐野市と田沼町、葛生町が合併してできた。氷室診療所は旧葛生町の所属である。葛生町は氷室村と常盤村、旧葛生町が1955年に合併してできたものであり、由緒ある村落・山間へき地である。産業は農業のほか石灰鉦山が現役で、ダイナマイトの音が時々響くのどかな土地である。アユやイワナの泳ぐ秋山川が村落の中心を流れ、解禁日には釣り人が多く訪れる。名水を利用した評判の良い蕎麦屋などもあるため、一年を通じて来訪者もまばらではない。

しかし、高齢化率は市内最高レベルの46.6% (2017年現在、佐野市全体は28.9%)、圏域人口800人強のうち、実に400人弱が高齢者である。子どもの数も少なく、圏域唯一の教育機関である氷室小学校の児童数は、

6学年合わせて25名、2021年度をもって廃校となること  
が決まっている。

こうして書くと未来のない土地に思えるが、佐野市  
は地域振興の要として「地域おこし協力隊」という職  
員を山間では唯一氷室地区に配備するくらいで、決し  
てこのまま死んでいくだけの地域ではない……と、私  
は思っている。

## 若者コミュニティへの期待

私が氷室診療所へ初めて来たのは2009年のことであ  
った。後期研修で島嶼部での医療を経験した私は、さ  
っそく卒業後5年目にしてのこの「医師一人診療所」  
へ勤務した。4年間の勤務で患者数も増え、新聞やテ  
レビなどが取材に来ることもあった。しかし、住民と  
の交流はあまりなく、今思うと信頼に足る医師であ  
ったかどうかは自信がない。特に若い世代との交流が大  
変不足であった。

定期的に患者として訪れてくれる高齢者と、その家  
族・親族とのつながりを把握できておらず、入院した  
り亡くなったりする際に初めて、「ああ、この人はこ  
この方の息子さんだったのか」と知ることもあって、  
「他所から来た医者」の域を出ない医療しか出来てい  
なかったように思う。

私はそういった至らぬ点や知識不足を痛感していた  
ので、4年の勤務を終えたあとは一旦、地域医療振興  
協会所属の都内の病院と協会内の地域医療機関で再度  
研鑽に努めた。その後、長女の小学校入学に合わせて  
2016年に再度この地に戻ったときには、なるべくコミ  
ュニティに参加するようにした。いや、積極的に参加  
しなくても、子どもを小学校に入れることにより、若  
者コミュニティに自動的に入れてもらった。

都会でも母親同士は「ママ友」の言葉があるように  
交流があるかもしれないが、この学校では父親のつな  
がりも濃い。一緒にバス旅行に出かけたり、バーベキ  
ューをしたり、地域の祭でのイベントを支援したりし  
ているうちに、あっという間にみな友人となった。下  
の子の通うやや都市部の幼稚園ではそういうことはな

いので、やはり地域性というものがあるように思う。

そうやってつながっている若い世代が、家族の枠を  
超えてネットワークを構築しているおかげか、親族が  
そばにいない高齢者のみの世帯を近所の若い人が把握  
していて、調子が悪いと知らせてくれることもある。  
自身の家族だけにとどまらず、周囲の他人をも気にか  
けてくれるのは、小学校で保護者同士が親密であるこ  
とと関係があるように感じている。

私はようやく地域の親しい人から「カズキ」と呼ば  
れ、気軽に健康相談をしていただける立場になった。  
せっかくへき地医療に身を捧げるからには、偉そうに  
距離をおいて先生と呼ばれる存在のままいるよりも、  
友人のように、親戚のように体の調子を話してもらえ  
る存在になりたかったので、こここのところ、ようやく  
自分の描く医師像に近づけた気がする。

## 通院の集約

そうやってコミュニティの輪の中に入っていくこと  
ができた私ではあるが、患者を診るときに今まで以上  
に気をつけるようにしているのが患者背景である。独  
居なのか家族と同居なのか、通院手段はどうか、  
他に通っている医療機関はないか、キーパーソンは誰  
か。どこに住んでいて、どれくらいの頻度で連絡をと  
ったり、会ったりしているか。実は本人より重症の疾  
患を持った家族がいて、介護が大変なのではないか、  
要介護度はいくつでどのようなサービスを利用してい  
るか、そもそも申請しているかどうか。

思えば当たり前のことだが、今までわからないまま  
にしていた項目も多く、すべての患者で以上のことを  
聴取するようにしてから、社会的な問題に早く気づけ  
るようになった。特に他に通っている医療機関の把握  
は重要に感じた。というのも、バスで半日以上の時  
間をかけてわざわざ整形外科の薬だけももらいに行く方  
や、90歳代で車を1時間も運転して、他の市の病院に  
行っている方さえいたからだ。

当院ですべての医療ができるわけではない。特に眼  
科領域などは器具もなく、やむをえず遠くの眼科への

通院を続けていただかざるを得ない超高齢者もいる。しかし、当院でできることを丁寧に説明し、理解いただくことで、不必要な遠くへの通院を減らすことができた。しかし、なかなか県の厚生局にはこの働きがご理解いただけず、内科標榜の診療所にしては平均レセプト点数が高い、投薬数が多いと指摘を受けたが、県健康福祉部や県医師会の協力を仰ぎながら当院の特殊性を訴え、少しずつご理解いただいている最中である。

## 制限がある中での在宅看取り

当診療所はあくまで公共の施設であり、働いている人員は私を含めて市職員・臨時職員で構成されているため、時間外、休日の対応は私がいるときのみ、一人で行っている。そうすると、問題になるのが重症の患者である。

どうしても不在にすることはあるので、その時に重病・大けがにでもなった場合には病院に搬送されることになるのだが、診療情報がないと受けてくださる病院の先生にも大きな負担がかかるし、患者自身に不利益が生じる可能性もある。そこで、独居で自分で病状を説明できない患者を中心に、診療情報提供書をあらかじめ用意し、市が配布している「救急医療情報キット」(写真2)に同封するようにした。

話はそれるが、救急情報医療キットは佐野市のいきいき高齢課が過去に配布していたもので、対象は独居ないし高齢夫婦の世帯だそうなので、その配布先の情報を提供していただけるように同課や市長に相談したものの、個人情報の扱いの関係で断られた。こういうところを改善して、一致団結して高齢者の健康を守るために動いていけたらいいと思うのだが、縦割り行政の中ではそうもいかないようだ。

話はそれたが、当地区にも最期まで自宅で過ごしたいという思いを持っている方がたくさんいる。その願いをなるべく叶えたいと思っているが、どうしても医師の不在で、確実な約束ができないのが心苦しいところである。地域の病院が核になったり、佐野市内にある5つの国保診療所が連携したりして、365日24時間



写真2 救急情報医療キット

の対応をできるように進言しているが、これも予算や協力できる医療従事者の不足などで、実現する日は遠そうだ。しかし、死亡診断書が書けず死体検案になってしまうリスクを避け、過剰医療による医療費の増大を防ぎ、患者の希望も叶える在宅看取りは極めて有用であり、また、「自宅で死んでいけるのならこの地に留まりたい」と考える高齢者も数多くいることから、地域活性にもなる。

私としても重症患者がいると日常生活にも少々の影響があるが、それでも最期までお付き合いできたときは、患者や家族の願いを全うできたという想いで充足される。今後も在宅看取りの願いに対し「できる限りがんばります」と答え続けたいと思う。

## 学校保健委員会と公民館での健康講座

医療のことに 대해 だいぶお話をさせていただいたが、地域の健康の要として予防についてもいろいろお手伝いさせていただく機会がある。その一つが廃校になってしまう小学校での「学校保健委員会」である(写真3)。毎年保健委員の児童が先生方とテーマを決めて、全児童にアンケートをとったり、詳細をインターネットで(!)調べ、その情報を劇にして伝えたりする催しで、保護者として参加するだけでも大変楽し



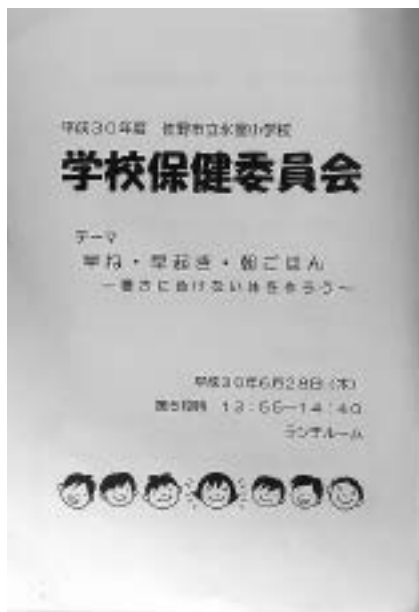


写真3 学校保健委員会

いが、校医である私はそれに少し補足をしたりする。子どもたちは素直な質問をしてきて、しばしば難問であったりするため、こちらとしても手を抜くわけにはいかず、なかなかの緊張感があるイベントとなっている。学校が統廃合されていく将来にも、このような催しが引き継がれていくことを願う。

なお、大人向けの催しもあり、秋に毎年診療所の向かいの公民館で健康講座を開催させていただいている。2時間ほどと講演時間が長いので、聞きに来てくださる方をいかに眠くさせないかということに気を配らなくてはならないが、わざわざこの講座を聞きに来てくださる方々は大変熱心で、質問も多く飛び交う。

扱う話題は地域の高齢者やその家族に重要な事柄を選ぶのだが、当然、内科領域にとどまらず、ロコモティブシンドロームや救命措置・応急処置などが選ばれることもあり、講演資料を作るにあたって私も大変勉強しなければならず、へき地医療で疎かになりがちな知識のアップデートにおいていい刺激になっている。健康講座を聞きに来てくださった方が当院で診察、検査を受けて通院するようになってくださることもあり、これもぜひ継続したい催しである。

## 小児科領域に関する需要増

繰り返し、当地区の小学校が近々廃校になるということを書いたが、それでも子どもがいないわけではない。最寄りの病院で小児科が撤退され、また、小児科クリニックの閉院も重なってしまったため、自動車で30分圏内に一軒も小児科がなくなってしまったことから、行くあてを失った方々が増えていて、ここ1~2年、小児の患者が割と遠方からも来るようになった。

小児科を専門的に研修したわけではないので、この領域に自信があるわけではないが、へき地医療でそういうことも言ってもらえないので、最近は積極的に小児科領域の医薬品や検査キットなどを揃えている。また、当院は患者がそれほど多くないため、説明に時間を割くようにし、日常生活のケアを十分に行うことで、むやみな投薬をせずすむよう、なるべく指導している。一人あたりの時間が長く取れるのも、へき地医療のいいところである。

## 氷室地区の抱える問題～交通弱者～

どこのへき地でもそうだが、当地区でも高齢化率が極めて高くなってきている。約50%ということは、高齢者を支える若者が少ないということだ。高齢者の独居、あるいは高齢夫婦のみの世帯も大変多い。

実際、当院へ通院する患者で80歳以上にもかかわらず、送迎者がいないため自力で運転して来院する方も多い。昨今、高齢者の医療機関駐車場で交通事故が多いので、行き帰りの運転の様子もなるべく観察するようにしている。先日は運転の様子がおかしいので詳しく診察・検査したところ、硬膜下血腫が見つかったこともあった。

公共交通機関が十分であれば、このような状況も少しは緩和されるのであろうが、唯一のバスは本数が多いとは言えず、なかなか利用していただけない。毎年自治体に増便を依頼しているが、予算がないの一点張りでお金には代えられない安全性の確保について説明

しても、なかなかご理解をいただけない。かといって、公立の当院で独自に送迎車を出すのはいけないのだそうで、なかなか画期的な改善案が出せない。

現状は訪問診療によって交通弱者に対応しているが、それにも限界があるだろう。高齢者の交通事故は全国的に問題になっているので、近いうちに公共交通機関が重視されていく社会に変化することを望むのみである。

## 未来を育みたい

佐野市は隣の栃木市をライバル視しているが、栃木市は「住みたい田舎 ベストランキング」(宝島社「田舎暮らしの本」によるランキング)で子育て世代が住みたい田舎部門第1位のほか堂々上位を占めていて、佐野市は圧倒的に遅れを取っている状態であ

る。一応移住には力を入れ始めており、特に当地区に移住を促すべく「おためし住宅」を用意しているが、なかなか定住者の新規確保は難しいようだ。

学校もなくなる予定で、観光資源もそれほどなく、職業も限られているので当たり前のことではあるが、それでも少数の方がこの地で新しくかき氷屋・カフェを開業したり、里山の文化を保存すべく活動したりしてくれていて、嬉しい限りである。

ホテルも見られ、アユも釣れる清流秋山川を私は愛しており、ここに定住するつもりがある。しかし死んでいく集落を看取る役割になるつもりはない。願わくば、私の使命が終わる頃にもこの町に子どもの声が聞こえ、バスが通い「氷室診療所があるからこのあたりに住んでも安心」と言われるような場所であってほしいと思う。